

12.施設入所している高齢女性へのネイルケアによる反応

寺下憲一郎、尾原喜美子、高橋永子、山脇京子、青木早苗
高知大学教育研究部医療学系看護学部門

【はじめに】 ネイルケアは爪とその周辺の手入れのことを指し、美容や身だしなみといった化粧行為として実施されているだけでなく、爪の補強・修復といった医療行為としても実施されており、近年ネイルケアへの社会的な関心が高まっている。加えて、終末期であってもネイルケアによる指先のおしゃれは、気分転換や癒しの効果を持っていると松本らは述べており¹⁾、堤谷はネイルケアとマッサージをすることで高齢女性のQOLと免疫機能が有意に向上したと述べている²⁾。そこで、老人福祉施設に長期入所している高齢者に対してネイルケアを実施することで、ネイルケアが高齢女性の日常生活にどのような影響を与えるのか明らかにし、高齢女性のQOL向上に向けた支援への示唆を得たいと考えた。

【方法】 研究対象者は老人福祉施設に入所している65歳以上の高齢女性で、同意を得られた13名に行った。データ収集期間は、2009年4月から8月とした。調査方法は対象者に対してネイルケア実施1週間後に、身体的・精神的影響、環境との関係について焦点をあてた半構成的面接を行った。データは逐語録に起こし、ネイルケア実施により起こった感情・反応などに関連した内容を文脈ごとに抽出し、KJ法にて分類・分析を行った。

倫理的配慮として、所属大学医学部倫理審査委員会の審査を経て承認を得た上で、本研究の主旨・方法、参加意思・拒否の自由などを文書及び口頭にて説明し同意書に署名を得た。

【結果】 対象者の年齢は、70代から90代の女性で、そのうちネイルケア経験がある高齢女性は2名であった。高齢女性のネイルケア1週間後の捉え方から、『気持ちの高ぶり』『新しいものの発見』『相互交流の広がり』『高齢女性には不釣合い』の4つの大カテゴリーが抽出できた。『気持ちの高ぶり』は、ネイルケアにより楽しい気分、生き生きする気分など感情に変化が現れ、気分転換になったとの意見があった。『新しいものの発見』は、ネイルケアにより爪の手入れに対する関心・認識に変化を感じていた。また、当初ネイルケアに対し拒否感を感じていたが、ネイルケアは特別な事ではなく化粧に近い、もしくは同様の行為であると感じ、おしゃれへの関心が出現していた。『相互交流の広がり』は、入所者同士でネイルケアの見せ合いを行うなど、他者との交流に変化が生じていた。その反面、目立つことへの拒否感が強く、塗っていない人への遠慮が見られた。『高齢女性には不釣合い』は、老化に対するあきらめを感じており、ネイルケアでは身体症状の緩和にはならないと感じていた。また、日常生活に変化を感じておらず、変化はしないものという意見もあった。

【考察】 高齢になると年相応にするべきという根強い意識や、他の入所者への遠慮がある反面、「爪がきれいになってうれしい」などの肯定的な意見もあり、『気持ちの高ぶり』『新しいものの発見』などから気分転換になったと感じていることがわかった。また、ネイルケアが初めての対象者が多かったことが、『気持ちの高ぶり』『新しいものの発見』となり、『相互交流の広がり』につながったのではないかと考えられる。高齢女性の生活に、ネイルケアがどのような効果を与えるのか本研究だけでの実証は困難であるが、ネイルケアが変化の少ない高齢者の日常生活に多少の潤いを与えることが出来たと考えられる。

【まとめ】 高齢女性はネイルケアをすることで、個人差はあるものの少なからずQOL向上につながるということがわかった。今後の課題として、対象者を老人福祉施設に入所する高齢女性のみならず、青年期・

成人期も含めた長期療養中の患者や抗がん剤治療中の患者の QOL、及び免疫力との関係について検討し、調査方法についても客観的指標を用いた方法を検討していきたい。

- 1) 松本典子, 松岡智子, 中橋恒 ; 終末期医療患者におけるネイルアートの療法的効果について, 死の臨床, 27(2), p 226, 2004.
- 2) 堤谷めぐみ, 小川美奈子, 若林紋ら ; 化粧やネイルケアが高齢者のライフスタイルや QOL と免疫能の向上に及ぼす影響, コスメトロジー研究報告, 16, p 76-86, 2008.